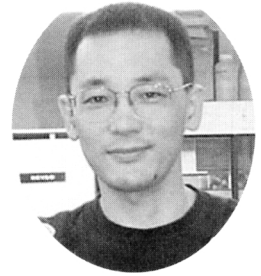


## 教授就任のご挨拶

長崎大学熱帯医学研究所  
病原体解析部門  
感染細胞修飾機構分野

金子 修



瘡<sup>ぎやく</sup>疾<sup>しつ</sup> 大いに世間を騒がせ<sup>さわ</sup>聞かせ  
学徒金子 黄金週間に熱研に上る

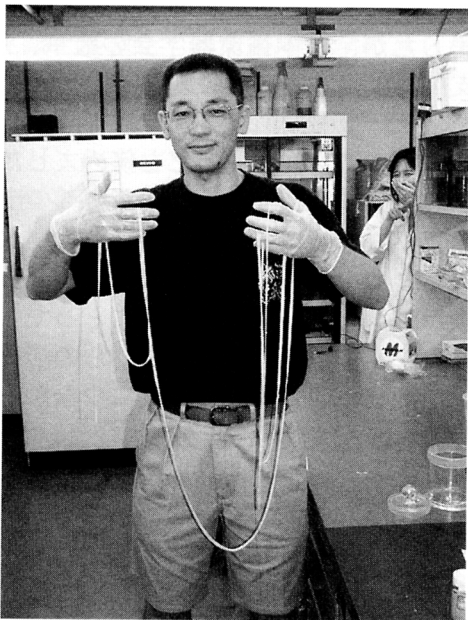
この度、平成19年5月1日付けをもちまして長崎大学熱帯医学研究所・感染細胞修飾機構分野（病原原虫学）教授を拝命しました。誌面をお借りし同窓会の諸先生方にご挨拶申し上げます。

私は大阪生まれの大阪育ちで、幼少時の刷り込みのまま父が通った高校・大学（大阪府立天王寺高校、大阪市立大学医学部）に進学しました。大学時代の1980年代後半、1ドルが200円台から120～150円のレートに急落し、海外に憧れていた私は夢中で旅行に出かけました。日本にいと余り感じないことなのですが、途上国を旅行すると、世界的には感染症がいかに重大な疾病として日常生活に存在しているのかが見えます。私自身も原因不明の下痢は言うに及ばず、インドやペルーで細菌性赤痢にかかり、帰国後に2回も隔離病室ですごしました。このような学生だった私ですが、医動物学の講義で「マラリアは世界的規模で重大な疾患であるにもかかわらず、対策が遅れている」と聞いたとき、「マラリア」という言葉に雷に打たれたような天啓を感じたのです（これは冗談ではなく、本当のことです）。4年生の時の修業実習では当然のごとく、マラリアの課題に参加しました。

しかし、医師国家試験をなめて勉強をさぼっていた私は、卒業直前は頭に単語を詰め込むのに追われ、とても卒業後の「熱帯医学」の研修先を探す余裕もなく、また研究で食べていけるとも思わず、「アフガニスタンに医師を派遣することがある」と言っていた母校の整形外科教室に入局しました。しかし、研修先は人工関節置換を主とする病院で、将来像が私の理想からかなり異なることが見えてきた研修医2年目、母校の医動物学教室で大学院を終えて内科

レジデントとして私の勤務していた病院に赴任されてきた先輩と廊下でばったり出くわしました。この出会いがきっかけで、大学院で「マラリア」に関わるという選択肢が見え、キャリア・チェンジの可能性を探りたいと考えるようになりました。そして、かつて修業実習で教えていただき、その後、大阪工業大学に転出されていた田辺和裕先生（現大阪大学微生物病研究所教授）に学外指導者として研究デザインなどをお願いし、分子・細胞生物学的実験手法などは生物物理学教室におられた木村政継先生（現放射線同位元素実験施設助教授）に指導していただくという変則的な条件で、母校の医動物学教室の大学院生となったのです。在学中はベトナムやバヌアツにマラリア感染者の血液を採集に行く機会をいただき、それらの地域で集めた血液中の熱帯熱マラリア原虫の遺伝子多型の解析を行い、その成果が博士論文となりました。この「仕事で熱帯地域に行ける」という世俗的側面も大きい魅力でしたが、それに加えて、研究課題を解いてゆくパズルの要素、競争者が存在するゲーム的側面が見えてくるにつれ、マラリア研究には人生を掛ける価値があり、かつ、自分の性格に適合するという確信を得ることができました。このようにして、祖父から続く開業医3代目長男に刷り込まれた「開業医至上主義思想」からの最終的な一歩を踏み出し、基礎研究の世界に入る決断をすることとなったわけです。

大学院卒業後は、愛媛大学医学部寄生虫学教室の鳥居本美教授の紹介で、マラリア原虫の赤血球侵入研究分野の第一人者である米国国立アレルギー感染症研究所・マラリア細胞生物学分野のミラー博士の下でポスドクとして3年半を過ごしました。同じフロアにマラリアの基礎研究を行っているラボが4つもひしめき、飲み会を通じて、生物としてのマラリア原虫について広範な知識を得ることが出来たとともに、ポス



日本海裂頭条虫

ドク仲間の多くがマラリア研究分野に残ったため、結果的に世界にわたる広い人脈を持つことができました。留学中に第一著者としては高い

インパクトのある論文は出せませんでした。得られた知識と人脈は二三の論文とは比較できない価値があると感じています。私の師匠の一人のモットーである「誘われた飲み会は断らない」を9割ぐらい実践した結果でしょうか（注：「注がれた酒は飲み干す」ということではありません）。

2000年に鳥居先生に誘われ、愛媛大学に就職し、それ以来、マラリア原虫の赤血球侵入に関する研究を継続するとともに、マラリア感染赤血球の接着現象についても研究範囲を拡大しました。タイや中国といったマラリア流行地の研究者との個人的人脈も開拓・強化し、流行地のマラリア原虫を用いた共同研究も開始しました。その後はおきまりどおり、飢えては食らい、渴えては飲み、夜の泊まりに朝の旅立ち、此度、長崎にやって来ることと相成りました。微力非才の身ではございますが、今後は長崎大学の発展のために精励努力をいたす覚悟でございます。先生方にはご指導ご鞭撻をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。